

博士学位論文審査要旨

2017年1月17日

論文題目： ヒエロニウムスの「ヘブライ的真理」の研究
——その聖書翻訳論と旧約引用理解とを手がかりに——

学位申請者： 加藤 哲平

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 越後屋 朗

副査： 神学研究科 准教授 勝又 悦子

要 旨：

本研究は、ラテン教父エウセビウス・ソフロニウス・ヒエロニウムス（347-420年）の「ヘブライ的真理」の思想、すなわち旧約聖書のヘブライ語テキストにこそ真理が存するという思想を解明するものである。

第1章では、「ヘブライ的真理」には、ヒエロニウムスの旧約引用理解が深く関わっていることを示した。ヒエロニウムスが、七十人訳（ギリシア語訳）ではなくヘブライ語テキストにこそ真理が宿っていると確信したのは、ローマ時代（382-385年）からであった。その頃彼はすでに高度なヘブライ語の知識を持っており、また「ヘブライ的真理」という言い回しでこそないものの、同様のコンセプトを表明していた。ヒエロニウムスは七十人訳ではなくヘブライ語テキストと一致する旧約引用を示すことで、「ヘブライ的真理」への回帰を呼び掛けていたのである。

第2章では、ヒエロニウムス研究史の傾向を分析した上で、本研究が取るべき方向性を確認した。欧米においては、ヒエロニウムス研究は教父学のみならずユダヤ学においても発展してきた。なぜならば、ラビ文学研究では、現存するラビ文学と、教父学の中に保存されている「アガダー（伝承）」とを比較するという方法論が取られており、中でもヒエロニウムスの著作が注目されたからである。ユダヤ学においては、ヒエロニウムスは深いユダヤ伝承の知識と高いヘブライ語能力を持っていたと見なされたが、多くの教父学者はこの両方を疑問視した。

第3章では、古代における聖書学の歴史の中にヒエロニウムスを位置づけた。ギリシア・ラテン聖書学は、大きく「七十人訳的伝統」と「非七十人訳的伝統」（ヘブライ語テキストに近づこうとする伝統）とに分けることができる。両伝統を併せ持つヒエロニウムスは、ギリシア・ラテン聖書学の歴史の中で初めて七十人訳から離れ、ヘブライ語テキストそのものに価値を見出した。

第4章では、ヒエロニウムスの翻訳論の特徴を、キケローとアウグスティヌスとの比較によって明らかにした。キケローの翻訳論の特徴は、第一に、意識と逐語訳との二項対立と、第二に、読者の原典リテラシーに基づいた意識の重視である。この二つの特徴は、アウグスティヌスとヒエロニウムスに共に受け継がれている。アウグスティヌスは、聖書翻訳は逐語訳が好ましいと考えた。他方でヒエロニウムスは、基本的に意識を旨としたが、彼の翻訳の底本は読者が読むことのできないヘブライ語テキストだったので、彼は読者に対し「ヘブライ人に訊け」と述べた。

第5章では、「ヘブライ的真理」の思想を、新約聖書における旧約引用の問題を通して考察した。ヒエロニウムスは、旧約引用がヘブライ語テキストと異なる場合には、それを「意識」として受け入れたが、七十人訳がヘブライ語テキストと異なる場合には、それを「誤訳」として拒絶

した。なぜなら、第一に、訳文を意図的に改変した七十人訳は信頼できないからであり、第二に、キリストの到来を「歴史」として知っている新約聖書の使徒は、それを「預言」としてしか知らない七十人訳よりも信頼できるからである。

第6章では、『歴代誌序文（ヘブライ語）』を検討することにより、これまでのヒエロニムスの議論の有機的な繋がりを明らかにした。同序文の中で彼は、ヘブライ語テキストの重要性と自身の翻訳の正当性を証明するために、「ヘブライ人」、「使徒」、「キリスト」という三つの権威者に依拠した。まず彼は文献学的な証明のために「ヘブライ人」に依拠し、次に神学的な証明のために「使徒」（福音書記者とパウロ）に依拠した。最後に「キリスト」であるイエスを最大の権威者として、ヘブライ語テキストと自身の翻訳とを神学的に正当化した。

第7章は結論である。ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」の思想とは、三つのテキスト（ヘブライ語テキスト、七十人訳、新約聖書）間の神学的な問題へと踏み込んでいくことだった。彼にとって新約聖書の真理の本当のありかは旧約聖書のヘブライ語テキストであったのである。

本論文は、日本で研究の遅れているヒエロニムスについて本格的に取り組んだ意欲的な研究である。第1次資料に基づき、従来評価の定まらなかったヒエロニムスのヘブライ語能力を明らかにし、新約聖書における旧約引用の理解を手がかりに、ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」の思想を解明することに成功している。本研究は、ヒエロニムス周辺のユダヤ教とキリスト教の影響関係も多層的に考察しており、その多様にわたる広い射程のゆえに、教父学やユダヤ学ばかりか、新約学、聖書本文批評学など多方面に貢献することも期待される、きわめて完成度の高い論文である。よって、本研究は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2017年1月17日

論文題目： ヒエロニュムスの「ヘブライ的真理」の研究
——その聖書翻訳論と旧約引用理解とを手がかりに——

学位申請者： 加藤 哲平

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 越後屋 朗

副査： 神学研究科 准教授 勝又 悦子

要 旨：

加藤哲平氏は、2010年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程前期課程を修了、同年4月、後期課程に入学し、研究指導を受けた後、2013年9月に退学した。引き続き Hebrew Union College 大学院博士課程（米国シンシナティ）に入学し、現在研鑽中であるが、2016年8月、同志社大学に学位請求論文を提出した。2017年1月17日午後1時より、神学研究科委員会は加藤氏に対して約2時間の総合試験を実施し、氏からユダヤ学および教父学を背景にしたヒエロニュムスに関する的確な応答を受け、氏が学位請求論文の主題領域について深い洞察を有していることを確認した。研究に必要な語学力については、論文執筆のためのラテン語、ヘブライ語、アラム語、ギリシア語、英語、ドイツ語、フランス語の文献を正確に読みこなしていることにより、十分なものと認められる。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」の研究
——その聖書翻訳論と旧約引用理解とを手がかりに——

氏名： 加藤 哲平

要旨：

本研究は、ラテン教父エウセビウス・ソフロニウス・ヒエロニムス（347-420）の「ヘブライ的真理」の思想、すなわち旧約聖書のヘブライ語テキストにこそ真理が存するという思想のロジックを解明するものである。

第1章では、「ヘブライ的真理」には、ヒエロニムスの旧約引用理解が深く関わっていることを示した。彼は「ヘブライ的真理」という用語を、391年にベツレヘムで書かれた『創世記におけるヘブライ語研究』序文の中で初めて用いた。これは、彼が七十人訳に基づく聖書改訂を途中でやめ、ヘブライ語テキストからの聖書翻訳に切り替えた時期でもある。「ヘブライ的真理」という用語の初出とヘブライ語テキストからの聖書翻訳の開始とがほぼ同時期だったことから、従来ヒエロニムスは390/1年前後に七十人訳を捨て、ヘブライ語テキストに「転向」したのだと見なされてきた。しかしながら、彼はベツレヘムに移る前のローマ時代（382-385年）からすでに、高度なヘブライ語の知識を有しており、また「ヘブライ的真理」という言い回しでこそないものの、同様のコンセプトを表明していた。その証拠である『書簡20』（383年）には、「真理はヘブライ語写本からこそもたらされるべきである」という一節と共に、新約聖書における旧約引用の具体例が挙げられている。ヒエロニムスは、これらの旧約引用が七十人訳ではなくヘブライ語テキストと一致していることを示すことで、「ヘブライ的真理」への回帰の必要性を呼び掛けたのだった。

第2章では、ヒエロニムスの研究史におけるバイアスについて考察した上で、本研究が取るべき方向性を再確認した。日本におけるヒエロニムス研究は未開拓の分野であるため、体系的な先行研究は存在しない。一方で、欧米においては、ヒエロニムス研究は教父学のみならずユダヤ学においても発展してきた。なぜならば、初期のユダヤ学におけるラビ文学研究では、現存するラビ文学と、教父学の中に保存されている「アガダー的要素」とを比較するという方法論が取られており、中でもヒエロニムスの著作は特に注目されてきたからである。こうした情報源としてのヒエロニムスへの絶大な信頼は、彼のユダヤ伝承の知識の深さとヘブライ語能力の高さによって担保されてきた。しかしながら、多くの教父学者はこの両方を疑問視したのである。すなわち、彼がユダヤ人教師から習った聖書解釈は実はギリシア教父からの盗作なのではないか、また彼はヘブライ語すら満足に読めなかったのではないかと。いうなれば、ヒエロニムス研究においては、彼の聖書解釈の独自性とヘブライ語の能力とが問われているといえる。

第3章では、古代における聖書学の歴史の中にヒエロニムスを位置づけた。ギリシア・ラテン聖書学は、大きく「七十人訳的伝統」と「非七十人訳的伝統」とに分けることができる。前者は七十人訳を正典として正当化する伝統であり、後者はヘブライ語テキストに近づこうとする伝統である。両伝統を初めて統合することを試みたのはオリゲネスであった。彼は『ヘクサプラ』において、両伝統からのギリシア語諸訳を一行に並べることで、それぞれの違いを示した。しかしながら、ヘブライ語を解さないオリゲネスの関心は、究極的には七十人訳に向けられていた。彼の衣鉢を継いだヒエロニムスもまた両伝統を併せ持つ人物だったが、彼はギリシア・ラテン聖書学の歴史の中で初めて七十人訳から離れ、ヘブライ語テキストそのものに価値を見出した。

ヒエロニムスの三期に渡る聖書の改訂・翻訳作業において、第一期と第二期とは七十人訳に基づいた古ラテン語訳の改訂であったが、第三期はヘブライ語テキストからの翻訳であった。

第4章では、ヒエロニムスの翻訳論の特徴を、キケローとアウグスティヌスとの比較によって明らかにした。キケローの翻訳論の特徴は、第一に、意識と逐語訳との二項対立と、第二に、読者の原典リテラシーに基づいた意識の重視である。この二つの特徴は、アウグスティヌスとヒエロニムスに共に受け継がれている。アウグスティヌスはヒエロニムスに対し、ヘブライ語テキストではなく七十人訳を底本として聖書を翻訳するように頼んだが、それは七十人訳が神学的に「正しい」聖書であるのと同時に、ギリシア語で書かれているからだった。読者が原典と比較して翻訳を読むためには、原典が読者の読める言語で書かれていなければならない。ただし、自身もギリシア語が達者ではなかったアウグスティヌスが想定していた読者のレベルは低かったため、キケローと異なり、彼は聖書翻訳の方法論は逐語訳が好ましいと考えた。一方でヒエロニムスは、聖書以外は意識、聖書は逐語訳したと考えられてきたが、彼のテキストを注意深く読むと、実際には聖書も含めて基本的には意識を旨としていたことが分かる。彼はキケローと同じように、逐語訳を必要としない高度な原典リテラシーを持った読者を想定していたのである。しかし、彼の翻訳の底本はヘブライ語テキストだったので、多くの読者は原典にアクセスできない。そこでヒエロニムスは読者に対し、自分でヘブライ語を読めないなら、代わりに「ヘブライ人に訊け」と述べたのだった。

第5章では、「ヘブライ的真理」のロジックを、新約聖書における旧約引用の問題を通して考察した。この考察は、第4章で残された問い——ヒエロニムス自身は意識を方法論としたにもかかわらず、なぜ七十人の翻訳者にはヘブライ語テキストとの厳密な一致を求めるのか——にも回答を与えることになる。ヒエロニムスは、「ヘブライ的真理」のコンセプトを発表した『書簡20』を含め、全部で七つのテキストにおいて、ヘブライ語テキストと一致するが七十人訳と一致しない旧約引用の具体例に言及している。特に『歴代誌序文（ヘブライ語）』においては、福音書、パウロ書簡、そしてイエスの台詞と段階的に旧約引用を紹介した上で、自身の議論を要約している。この要約された議論の全体は、『翻訳の最高の種類について（書簡57）』に見出すことができる。同書において、ヒエロニムスは、旧約引用がヘブライ語テキストと一致するが七十人訳と一致しない場合のみならず、三者が互いに異なる場合、そして旧約引用のみが異なる場合をも挙げている。彼は旧約引用がヘブライ語テキストと異なる場合には、それを「意識」として受け入れたが、七十人訳がヘブライ語テキスト異なる場合には、それを「誤訳」として拒絶した。なぜなら、第一に、訳文を意図的に改変した七十人の翻訳者は信頼できないからであり（それゆえに、七十人訳はヘブライ語テキストと厳密に一致しているときしか受け入れられない）、第二に、キリストの到来を「歴史」として知っている使徒は、それを「預言」としてしか知らない七十人よりも信頼できるからである。

第6章では、ヒエロニムスの思想の中核をなす『歴代誌序文（ヘブライ語）』を検討することにより、これまでの彼の議論の有機的な繋がりを明らかにした。ポワティエのヒラリウスやアウグスティヌスが文献学的かつ神学的に七十人訳を正当化したのに対し、ヒエロニムスもまた同じく文献学的かつ神学的に、ヘブライ語テキストの重要性と、それを反映する自身の翻訳の正当性を証明した。その際に、彼は「ヘブライ人」、「使徒」、そして「キリスト」という三つの権威者に依拠したのだった。第一に、文献学的な証明のために、彼は「ヘブライ人」に依拠した。第4章で見たように、彼の翻訳の読者は、翻訳と原典との比較可能性を重視したが、ヘブライ語テキストを翻訳の底本にするとそれが叶わなくなる。そこでヒエロニムスは、読者がヘブライ語を知らずとも自身の翻訳と原典とを比べられるように、「ヘブライ人に訊け」と勧めたのである。第二に、神学的な証明のために、彼は「使徒」（福音書記者とパウロ）を通してヘブライ語テキストの正当性を示した。第5章で見たように、使徒たちの旧約引用が七十人訳ではなくヘブ

ライ語テキストと一致するのであれば、真理はヘブライ語テキストに存するのであるから、それを底本とした彼の翻訳にもまた「ヘブライ的真理」が宿っていることになる。これは、旧約引用を軸とした、預言としての旧約聖書とその成就としての新約聖書という神学的な聖書理解に基づく議論だと言える。最後に、ヒエロニムスは「キリスト」であるイエスを最大の権威者とした。使徒の場合と同様に、イエスの台詞にもヘブライ語テキストと一致するが七十人訳と異なる箇所があると示すことで、ヒエロニムスはヘブライ語テキストと自身の翻訳とを神学的に正当化したのである。

第7章は結論である。以上より、ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」の思想とは、二つのテキスト間の文献学的な問題——ヘブライ語テキストと七十人訳とのどちらが旧約聖書の翻訳として正しいのか——を解決することにとどまらず、三つのテキスト間の神学的な問題——新約聖書における旧約引用に含まれている啓示を正しく預言していたのは、ヘブライ語テキストと七十人訳のどちらなのか——へと踏み込んでいくことだったと言える。しかもこの思想の萌芽は、通説のように、彼が「ヘブライ的真理」という用語を最初に用いた390/1年前後のベツレヘム時代ではなく、それ以前のローマ時代にすでに見られるものであった。旧約引用が七十人訳ではなくヘブライ語テキストと一致していることへの認識が、ヒエロニムスに、新約聖書の真理の本当のありかは旧約聖書のヘブライ語テキストであることを教えたのである。